

日本人のみた外国 インドのタクシー -- 騙しの手口あれこれ (カルチャー・ショック)

著者	中村 純
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	125
ページ	40-40
発行年	2006-02
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00047470

インドのタクシー—騙しの手口あれこれ

中村 純

タクシーで騙された経験は数限りなくあるが、インドでのそれは他とは一味違って鮮明に記憶に残る。紹介しよう。

近年カースト制度が緩んだとはいえ、一九八〇年頃は依然としてその残滓は根強かった。タクシー運転手はカーストでは卑しい職業に属するということで、一般にヒンズー教徒は敬遠するため、この職業に就くのはカースト制度の緩やかなシーク教徒が多かった。彼らは図体が大きく、どういふ訳か殆どの場合、運転手と助手の二人が乗っていた。また、当時はガソリン価格が頻繁に変わったため、メーターの調整が追いつかず、タクシーには修正料金表が備えられていた。数枚の修正料金表を持つタクシーもあって、下車時の料金の支払い交渉では、運転手とのトラブルが日常茶飯事であった。しかもシーク教徒の大男二人に半ば脅されて払われるケースが多かったため、タクシーの利用は極めて少なかった。

そんな時、フィージからのクラスメートと二人で南インドを旅行した時のこと。カルカッタから飛行機でハイデラバードに着き、タクシーで宿に向かった。料金支払時に運転手は例の料金表を出し、「今日ガソリンが値上がりし、この料金表はそれに対応していないので、値上がり分も払え」と言った。だが、その運転手と助手は小柄で、こちらのフィージの相棒は図体が大きく十分威圧できる風采なので、常日頃から騙されていることもあり、「追加料金は絶対払わない」と突っぱねた。ところが運転手はしつこくホテルの部屋までついて来て、食いがたつたのである。それでも相棒と示し合わせて脅しながら「交渉の余地は無い」と言い追い払った。暫く後、彼らは渋谷帰って行ったので、普段の溜飲を下げたと二人で乾杯した。ところが翌日の新聞で、ガソリンが値上がったためタクシー料金も値上げされた、との記事を見たのであった。

さて、以下の騙しのテクニクはインドの専門家から聞いてはいたが、まさか自分が引つかかるとは夢にも思わなかったので、気づいた時は腸が煮えくり返った。

ボンベイ（現在のムンバイ）からプーナに行った時、ボンベイ空港に着いて何やら怪しいタクシーに捕まり、「料金はメーター通りなので安心だ」とか言われ、タクシーは半ば強引に持ち運ばれた。乗り込むと何やら脅しめいた話が始まったがそれは常套なので適当にあしらっているうちに、州越えの乗り換えタクシー・スタンドに着いた。プーナはボンベイの属するマハラシュトラ州ではないので、タクシーを乗り換える必要があった。州を越えては走れないのだ。タクシー・スタンドに着いたが、降車地点の手前二、三メートルの所で降りるよう運転手に迫られた。トランクが重いので降車地点まで行くよう押し問答したが、埒があかないので諦めて降りた。メーター料金の九〇〇ルピーに一〇〇〇ルピー札を渡した。ところが運転手は、それを一〇〇ルピー札だと突っ返してきた。間違えて渡したかと思い、更に一〇〇〇ルピー札を手渡した。その時は別段気に留めなかったが、プーナ行きタクシーで所持金を数えて見ると、空港で換金したルピーがかなり減っていることに気づいた。思い返すとタクシー運転手は、一〇〇〇ルピーを一〇〇ルピー紙幣に換える手品をしたのであった。降車地点では警官が監視しているので、その手品が見破られるのを逃れるため手前でタクシーを止め、そこで払わせたのである。

この騙され方が悔しくプーナのホテルに到着後、ビールをしょたま呑んで忘れようとした。しかし、部屋の上で回る扇風機の下で酔いつぶれて眠り込んでしまったため、翌朝高熱を出しその後は這い付くばりの現地調査となってしまった。

（なかむら じゅん／アジア経済研究所
開発研究センター）